

乳児保育における保育士の意識に関する研究

— 乳児保育経験の有無が保育士の意識に及ぼす影響について —

上村 眞生・七木田 敦

(2008年10月2日受理)

Research on the Childcare Givers' Consideration in Baby Childcare
— About the influence that the presence of the baby childcare experience exerts
on the childcare givers' consideration —

Masao Uemura and Atsushi Nanakida

Abstract: In the baby child care, there is an important role to support man's growth development at the early stage. Moreover, it is necessary to consider the life maintenance and the safety control of the baby who is a passive person in the baby child care enough. As shown in these importances, the high quality of child care is required of the child care person who takes care of the baby. However, because of it is necessary knowledge and the technology may take up various topics in the baby child care, it is necessary the ability which is based on the experience might to acquire them. The purpose of this research is to examine a necessary consideration for the baby child care by comparing with the child care person who acquired the experience and who has little experience in the baby child care. As a result, the width of consideration by the difference of the experience of the child care person was not confirmed. However, the child care person's having consideration to the baby child care deepened more with an increase in experience became clear.

Key words: baby childcare, childcare giver, childcare center

キーワード：乳児保育，保育士，保育所

I. 問題の所在と研究の目的

生理的早産といわれる（ポルトマン，1961）人間において、高い潜在能力を有し、自ら成長しようとする点では能動的な存在である乳児であるが、生理的には受動的であり、保護者をはじめとする養育者の存在無くしては生命維持すらままならない。それだけでなく、本来持ち得る能力の獲得・発揮においても、養育者に委ねられるところが少なくない。

ところで、乳児に関して、わが国では、合計特殊出生率が低下する最中にあっても、乳児の保育所在園児数は増加している（増田，2005）。増田（2005）も言うように、これは核家族化や女性の社会進出に加え、

多様な保育ニーズに応えるべく保育施策の拡充がなされたことが理由として考えられる。これを踏まえれば、わが国においては、多くの保育所保育士が乳児の養育者を担っている状況が窺い知れよう。

このような状況にある保育士には、乳児の養育者として期待される所は大きい。例えば上田（2003）は、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児にとって、保育者が、第一愛着対象者の代理になり得るだけでなく、第一愛着対象者との愛着関係改善においても寄与する可能性を示している。また、松永ら（2001）は、乳児の状態把握、安心感の提供という点から、乳児保育における保育者と乳児の相互関係構築の重要性に言及している。このように、乳児保育において保育士に

は、乳児の安定した生活の確保に加え、生得的能力発揮を促す養育者としてセンシティブな関わりが必要とされている（阿部，2007；乳児保育研究会，2005）。

一方で、昨今、乳児の死亡事故やSIDS（乳幼児突然死症候群）の問題が度々取り沙汰されている。冒頭で述べたように、乳児はあくまで生理的には受動的であり、原因が定かではない状況でも簡単に命を落とす存在である。これに対して、インターネットやポスター、リーフレット等を通した啓発活動が行われている。そして、当然保育士も、このような乳児の安全管理について細心の注意を払わなければならない。

つまり、保育所保育士においては、養育者としての繊細な関わりと、細心の安全管理を両立することが求められているといえる。乳児保育や、保育所におけるリスクマネジメント等の文献を散見すれば（汐見ら，2007；田中，2006），その心構えや方法論、個別の事例への対応が紹介されてはいるが、これらの多岐に渡る情報は、保育士にどのように整理され、保育実践の中でどう発揮されているのかは定かではない。対象が乳児であることを踏まえれば、ある一定の水準が必要であることは疑いようがないが、乳児保育の経験の違いによって、各保育士間で違いがあることも考えられる。

そこで本研究では、乳児保育において、保育士がどのような意識を持って実践を行っているかを明らかにする。さらに、乳児保育の経験の有無により、その意識にどのような差異が生じるのかについて検討する。

II. 方法

乳児保育における保育士の意識を明らかにするため、インタビューによる調査を行った。

i) 調査対象

乳児保育を経験することで生じるであろう意識の差異を調べるため、H県にある私立S保育所に勤務する乳児保育の経験年数が異なる保育士3名を対象とした。保育士の選考は、幼児の保育・乳児の保育共に経験がある保育士、幼児の保育経験はあるが乳児保育の経験がない保育士、幼児の保育経験がないが乳児の保育経験がある保育士という理由で行った。各保育士の属性を表1に示す。

表1. 各保育士の属性

	A保育士	B保育士	C保育士
経験年数	12年	5年	1年
乳児保育の経験年数	7年	0年	1年

ii) 調査期間

2008年7月に調査を行った。

iii) 手続き

調査対象とした保育所の乳児クラスのA保育士に事前の聞き取りを行い、保育所での乳児の一日の生活の流れを調査した。それを基に、9つの保育場面（登園・あそび・排泄・おむつ交換・おやつ・ミルク・離乳食・午睡・降園）を抽出し、その際配慮することについてインタビューにより調査を行った。インタビュー中には許可をもらい録音、内容を書き起こした。

III. 結果

i) 登園

登園についての各保育士のインタビュー結果の要旨を表2に示す。

どの保育士についても、健康に関する意識が伺える。特に保育士Aにおいては、その場でできる対応はすぐに済ませるという姿勢が見られる。また、保育士Cについても、体調面での乳児の不安が確認された際は、継続してこまめに経過を観察しようとしている。保育士Bは、乳児の状態把握、体調管理については意識しているものの、乳児保育の経験がないことから、実際の行動まではイメージできないと考えられる。

表2. 登園について

保育士A 視診検温、保護者との情報交換、健康状態の把握、身体に異常があったら早めに対処(爪の伸び等)する

保育士B 咳や鼻水が出ていないかなど体調の具合を判断する、連絡帳を見てその子の状況を把握しておく

保育士C 前日に体調が悪かった子は体調を聞いて視診、検温で高めの時はこまめに検温する

ii) あそび

あそびについての各保育士のインタビュー結果の要旨を表3に示す。

三保育士とも、まずは子どもの安全確保を意識していることが分かる。その上で、保育士Cはあそびが子どもにとって適切かどうかという意識を持っている。さらに保育士Aは、あそびを發展させるためにどのような環境設定が必要であるか、自身がどのようなことをすればよいかをも意識している。また、「なめたり口にしておもちゃをその都度消毒する」という回答からは、目の前の子どもだけでなく、クラス全体の子どもを意識していることが推察される。そして、「動きやすい服装」、「ベビーカーやワゴンの点検」という回答からは、次のあそびの展開まで見通して目の前の子どもに接していると考えられる。

表3. あそびについて

保育士A	危険のないように環境(玩具、遊具)を整える。子どもの動きやすい服装を用意してもらう。外あそびの遊具点検、ベビーカー・ワゴンの点検、寝返りしても安全な空間を確保する。体を動かしてあそべる環境を整える。子どもから目を離さないように側に見守る。なめた口にしたおもちゃをその都度消毒する
保育士B	見守りながらケガをしないよう気をつける
保育士C	しっかりと見守り危険に配慮する。発達に合わせたあそびが出来るようにする。脱水症状にならないよう水分補給する。体調の変化がないか子どもの様子を見る

iii) 排泄

排泄についての各保育士のインタビュー結果の要旨を表4に示す。

昨今、感染症の問題が度々取り沙汰されているためか、排泄ということで、衛生管理について各保育士とも意識していることが分かる。その中で、保育士Aは乳児の心情にまで配慮していることが読み取れ、保育士Cは生活リズムの中での排泄の位置づけを意識している。また、保育士Aは排泄における対応について、より具体的なイメージを持っていることが考えられる。

表4. 排泄について

保育士A	いつも同じ環境を作る。便の時にはエプロンを変えゴム手袋着用、排泄後は手洗い消毒
保育士B	着替え等清潔に保つ
保育士C	排泄する時間を把握しておく、排泄後は消毒する

iv) おむつ交換

おむつ交換についての各保育士のインタビュー結果の要旨を表5に示す。

排泄同様、衛生管理に配慮する各保育士の姿が見てとれる。さらに保育士Cは乳児との関係づくりを、保育士Aは加えて安全管理についても意識していることが確認できる。

排泄と合わせて、保育士Bが担当している乳児以外のクラスでは、基本的に乳児とは排泄処理の仕方も異なり、配慮しなければいけないことは意識できるものの、実際の行動まではイメージできていない様が見える。

表5. おむつ交換について

保育士A	声をかけながら視線を合わせて交換する。おむつ交換台から目を離さない。交換後は必ず手洗い消毒
保育士B	処理後に手洗い消毒をする
保育士C	声をかけながら交換する。交換後は消毒する

v) おやつ

おやつについての各保育士のインタビュー結果の要旨を表6に示す。

椅子から落ちるというリスクファクターについてはどの保育士も意識しているが、嚥下や欲求まで意識できているのは乳児保育の経験がある二人の保育士である。ここでも保育士Aは、具体的な乳児の姿をイメージできていることが伺える。また、保育士Bについては、幼児期の子どもをイメージして回答していると推察され、乳児の具体的な生活や発達段階については、他の保育士との間に差があるといえるだろう。

表6. おやつについて

保育士A	食事用椅子に立ち上がりたないようにする。子どもの食欲に合わせて与える。大きき形状に気をつける
保育士B	姿勢が悪い時は声をかけケガをしないように見守る
保育士C	子どもの食べる量を把握しておく。椅子から落ちないように気をつける

vi) ミルク

ミルクについての各保育士のインタビュー結果の要旨を表7に示す。

喫食という観点について特に意識している保育士Bと保育士Cに対して、保育士Aは、前後の安全・衛生管理にも配慮していることが分かる。これは、目の前の状況だけでなく、見通しを持って乳児のことを把握していることに起因すると考えられる。

表7. ミルクについて

保育士A	哺乳瓶乳首は必ず煮沸消毒を行い保管庫で管理する。清潔な手で調乳する。必ず抱いて授乳し哺乳後は排気させる。授乳中声をかける。ミルクの温度に気をつける。冷凍母乳の取り扱いには十分注意する。飲んだ量を把握しておく
保育士B	ミルクが熱くないか確認する。飲んだ量を記録する
保育士C	ミルクの温度に注意する。授乳中声をかける。清潔を保つ

vii) 離乳食について

離乳食についての各保育士のインタビュー結果の要旨を表8に示す。

食事という観点からすれば、普段は幼児を対象としている保育士Bもイメージができるようで、保育士Cと同じような意識があることが分かる。とはいえ、乳児がまだ自分では食べることができないということはイメージしきれず、保育士Aと比較すると具体性にやや欠ける回答であった。また、「除去食」の件については、クラスを担当する立場にある保育士Aな

らでは、クラス全体を意識できている点であると考えられる。

表8. 離乳食について

保育士A	一人ひとりと視線を合わせ食事状況を把握しながら介助する。一人ひとりの子どもの発達・発育により離乳食を進めていく。食べ物の形状・食べ方・健康状態などに配慮する。食物アレルギーのある子どもの除去食の確認
保育士B	食べられる量・苦手なものを把握しておき無理なく食べられるようにする
保育士C	食べやすい大きさに固さを、声をかけながら食べさせる

viii) 午睡について

午睡についての各保育士のインタビュー結果の要旨を表9に示す。

昨今さかんに取り上げられている、SIDSの問題がある最中であり、普段乳児を保育している保育士Aと保育士Cは具体的に午睡時のイメージがあることが分かる。保育士Bも特にSIDSに関するであろう意識が伺えるが、他の保育士と比較すると、普段乳児を目の前にしていないためか、イメージに限界があるようである。

表9. 午睡について

保育士A	授乳後は直ぐに寝かせない。午睡中は必ず保育士が同室にて子どもの状態をチェックする。午睡用のバスケットが顔にかからないようにする。ベットの寝かしつけをあげ見直しよくしておく
保育士B	午睡中の咳や鼻水・たんがらみの咳いびきなどに気をつけて様子を見守る
保育士C	静かな環境の中で眠れるよう気をつける。それぞれ入睡する時間や午睡時間が違うので十分な睡眠が取れるようにする。寝ている間も5分ずつ様子を確認。先に目が覚めた子どもが帯ち着いた状態ができるようにする

ix) 降園

降園についての各保育士のインタビュー結果の要旨を表10に示す。

どの保育士も保護者との連携を重視していることが分かる。その中で、保育士Aは保護者に乳児を手渡すまで、自身の責任であることを強く意識していると考えられる回答であった。特に、乳児クラスの担任であり、長きに渡って乳児保育に携わってきたことから来る回答であると考えられる。

表10. 降園について

保育士A	段差のあるところにマットを敷いたり保育士が側において手をとり安全を確認する。一日の様子を保護者に伝える
保育士B	変わったことなどあれば保護者に伝達する。明るく送り出す
保育士C	1日の様子を伝えたり連絡帳でも様子を知らせる

IV. 考察

以上より、各保育士とも乳児を対象とする際、最初に意識しているのは安全管理であることが明らかとなった。それを充足した後、子どもの発達の促進や精神的な充足感を満たすことができるような配慮がなされている。すなわち、乳児保育において必要とされる養護的配慮を満たした上での教育的配慮（高野ら、2004）については、どの保育士においても認識されており、一定の基準として確立されていると考えられる。

その上で、乳児保育の経験年数の違いにより、配慮する深度が大きく異なることが明らかとなった。乳児保育の経験が浅い保育士は、配慮することは意識化できるものの、それを実際の子どものイメージと一致させることは困難であると考えられる。僅かでも毎日乳児と関わることで、乳児のイメージを明確に持つことができ、自身の意識と統合して保育実践に結び付けることができると考えられる。さらに、より経験を積むことで、乳児の発達についても明確なイメージを持つに至り、その中で今の状態の乳児にはどのような援助が必要かを取捨選択して、保育を行うことができるようになると考えられる。

とはいえ、本研究では、対象とする保育士が3名であり、妥当性については予想の域を出ないものである。そこで今後は、対象拡大のための量的調査を視野に入れた、検討が必要であると考えられる。

【引用・参考文献】

- ポルトマン, A. 1961 人間はどこまで動物か—新しい人間像のために—。岩波新書
- 増田まゆみ 2005 乳児保育。北大路書房。6-15.
- 上田七生 2003 乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程：第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に。広島大学大学院教育学研究科紀要。第三部。教育人間科学関連領域。51, 359-363.
- 松永静子, 汐見稔幸, 土谷みち子, 吉葉研司 2001 乳児保育における「保育者—乳児相互関係形成」の重要性について：0歳児の子どもと保育者の関係性を中心にして。日本保育学会大会研究論文集。No.54, 350-351.
- 阿部和子 2007 演習乳児保育の基本。萌文書林。
- 乳児保育研究会編 2005 乳児の保育の新時代。ひとなる書房
- 汐見稔幸, 小西行郎, 榊原洋一 2007 乳児保育の基本。フレーベル館。

乳児保育における保育士の意識に関する研究—乳児保育経験の有無が保育士の意識に及ぼす影響について—

田中哲郎 2006 保育園における事故防止と危機管理
マニュアル 改訂第三版. 日本小児医事出版.

高野陽, 増田まゆみ 2004 乳児保育のポイント 増
補版. 全国社会福祉協議会.